

坪田譲治と大正・昭和の文豪たち

会期:令和 8 年(2026)1 月 6 日(火)~2 月 15 日(日)

会場:岡山市立中央図書館 2 階視聴覚ホール前の展示コーナー

岡山市出身でわが国の児童文学に新しい分野を拓いた、岡山市名誉市民の坪田譲治氏の優れた業績を称え、岡山市が創設した坪田譲治文学賞の発表時期にあわせて、坪田譲治の遺族から寄贈されて岡山市立中央図書館が所蔵している資料を紹介するため、標記の企画展を開催します。

坪田譲治(明治 23 年～昭和 57 年)は、大正期から昭和期の戦前・戦後にかけて、岡山近郊の農村で過ごした少年時代の体験をもとにした数々の小説や童話を発表し、児童文学をはじめとする数多くの分野で顕著な業績を残しました。

しかし子どもたちを主題とする彼の文学は、いわば未踏の分野であり、一般の社会から広く評価を得るには大正期から昭和戦前期までの長い期間を要しました。いっぽう文壇には早くから彼の作品の真価を認めて、あたたかく支えた仲間の作家がありました。そこで坪田譲治が文壇で地歩を得るよりも少し前に名声を確立し、生涯にわたって友情を続けた下記の文学者について、当館が所蔵する資料を展示して坪田譲治の文学を近い世代の文豪たちとの関わりを通して紹介します。

佐藤春夫 (明治 25 年～昭和 39 年)

詩人・小説家・評論家、『田園の憂鬱』・『都会の憂鬱』など。文化勲章受章。

堀口大學 (明治 25 年～昭和 56 年)

詩人、『月下の一群』・『人間の歌』など。文化勲章受章。

尾崎士郎 (明治 31 年～昭和 39 年)

小説家、『人生劇場』・『篝火』など。文化功労者。

川端康成 (明治 32 年～昭和 47 年)

小説家、『伊豆の踊子』・『雪国』など。文化勲章、ノーベル文学賞受賞。

1 坪田譲治と近い世代の文豪たち

坪田譲治は岡山近郊の農村で過ごした少年時代の体験をもとに、生涯を通じて数々の小説や童話を発表しましたが、昭和戦前期に子どもたちを主人公とする独自の境地を拓いた小説で社会に広く知られるようになり、その後も活動の幅を広げて児童文学を中心に多くの領域で優れた業績を残しました。

しかし、彼の文学はそれまで未踏の分野であったことと、彼の名前が文壇に現れようとした昭和初期がプロレタリア文学の全盛期と重なったことから、大正期から短編の作品を発表していたものの、その真価が一般社会で広く認められるには長い期間を要しました。しかし彼へ師として関わった小川未明と鈴木三重吉や、それに近い立場の山本有三を別にしても、早い時期から彼の活動を近くで見て、期待と敬意を寄せていた文学者の仲間たちもありました。

坪田譲治の歿後に坪田家の方々から当館へ寄贈された資料（「坪田文庫」）の中からこのたび紹介する4人の作家（佐藤春夫、堀口大學、尾崎士郎、川端康成）は、坪田譲治と知り合った機縁はさまざまですが、大正期か、昭和のごく初期にはすでに文壇に名声を確立し、年齢が少し上の坪田譲治に先んじて文学者としての搖るぎない地歩を固めていました。

4人の中で堀口大學は戦後初めて坪田と知り合いますが、佐藤春夫と尾崎士郎と川端康成は坪田が下積みの苦労を重ねていた頃から励ましてきた存在で、深い友情は終生続きました。

坪田譲治はその人柄もあって生涯を通して分野を問わず多数の友人に恵まれましたが、その中でも文壇の重鎮として戦後まで多方面で活躍したこの4人の交友からは、文学者どうしが互いに認め合い、敬愛する関係について、多くを知ることができるものと思います。



小穴隆一（油彩画）「T君」 昭和15年

坪田正男氏寄贈品（坪田文庫、Aその他25）

「T君」と題して昭和16年の春陽会展に出品されたこの作品は坪田譲治の肖像画で、描いた小穴隆一は芥川龍之介から信頼を得てその全作品を装幀し、梅原龍三郎や安井曾太郎らと春陽会の中心となって活躍した画家です。暖かな色調と大胆な構図を得意とし、坪田譲治の作品の装幀も数多く行って、『子供の四季』などの傑作が世に出るのに貢献しました。その小穴が坪田を描いたこの絵は、苦難の時期を脱してようやく文壇に地歩を占め、余裕と自信を得て文学者としての風格も増してきた頃の姿を的確に捉え、生き生きと伝えています。

2 坪田譲治 明治23年(1890)生、昭和57年(1982)歿

坪田譲治は岡山県御野郡石井村大字島田(現在の岡山市北区島田本町)に生まれましたが、当時そこは岡山市郊外の長閑な農村で、父の平太郎は輸出用ランプ芯の製織所を起こした実業家でしたが明治30年に歿し、経営を兄が引き継ぎました。譲治は早稲田大学予科から本科の英文科へ進学し、後にプロレタリア文学で活躍する青野季吉、細田民樹らと知り合うとともに、児童文学に取り組む小川未明の門下となりました。

大学卒業後は雑誌に短編を発表する一方、実家の製織所の経営にもかかわり、大阪や兵庫で数ヶ年を暮らしましたが、昭和8年に社内の対立から島田製織所の取締役を解任され、東京へ戻って文学ひとつで身を立てる決意をしました。

それまでの坪田は、鈴木三重吉が大正7年から昭和11年まで発行した児童文学雑誌『赤い鳥』に昭和2年から童話を寄稿し、やがてその中心的な作家になって注目され始めますが、一般社会から広く迎えられるには長い期間かかりました。昭和10年の中編小説『お化けの世界』が初めて好評を博し、翌年の『風の中の子供』と昭和13年の『子供の四季』で評価を確立しました。

子どもたちを主人公にして純真で無垢な心に大人社会の対立や葛藤を映し出す彼の手法は小説に新生面を開きましたが、戦後にかけては童話や児童文学に力を注ぎ、民話の語り直しにも高い境地を示しました(『鶴の恩がへし』昭和18年、『日本むかしばなし』昭和32年)。また、児童文学研究のために蔵書を開放して自宅の敷地内に「びわのみ文庫」を設け、昭和38年から児童文学雑誌『びわの実学校』を刊行して後進作家を育てました。昭和29年に新潮社発行の最初の全集で日本芸術院賞を受賞し、昭和39年に芸術院会員に推挙されました。

坪田譲治 書(色紙)「吾は窮鼠 文学の猫を噛まん」

坪田正男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙7)

下積み時代の坪田譲治が経済的にも次第に窮迫する中で、鈴木三重吉から厳しい指導を受けたとき文学への不退転の覚悟を表したもので、生涯大切にした言葉を色紙にしたためたものです。

坪田譲治(原稿)「でんでん虫」(13枚)

(初出)『赤い鳥』昭和10年2月号 坪田正男氏寄贈品(坪田文庫、A 原稿7)

もとは「カタツムリ」という題で書かれた童話ですが、雑誌『赤い鳥』への掲載にあたって編集者の鈴木三重吉が厳しい指導を行い、随所に朱文字で修正の書き入れをしています。坪田の文章は原型をとどめないほど改変され、題も変更されましたが、彼は三重吉の指導をじっと受け入れて文体を磨き上げる糧としました。

坪田譲治（草稿）「子供の四季」（2編、各4枚）

（初出）『都新聞』昭和13年1月1日～6月16日

（初刊）『子供の四季』新潮社、昭和13年8月

坪田正男氏寄贈品（坪田文庫、A原稿3-1、A原稿3-3B）

『お化けの世界』（昭和10年）と『風の中の子供』（昭和11年）に続く坪田譲治の戦前の代表作『子供の四季』の冒頭の部分の草稿6編が長男の坪田正男氏から当館へ寄贈されています。一連の草稿をみると、最初は装幀を担当した小穴隆一との連名ですが、途中から坪田の単独名義になり、内容も大きく変わっています。なお、この作品が最初に発表された都新聞（現在の東京新聞）には、少し前の昭和10年に尾崎士郎の『人生劇場』が連載されて大ベストセラーになっていました。所蔵する6編のうち2編を展示しています。

坪田譲治『お化けの世界』竹村書房、昭和10年（初版）（坪田文庫）

山本有三の尽力で昭和10年に雑誌『改造』へ連載され、坪田譲治の最初のヒット作になった表題の中編小説を中心とする作品集の単行本の初版です。出版した竹村書房からは尾崎士郎の『人生劇場』も同年に刊行されていました。



坪田譲治『子供の四季』新潮社、昭和13年8月（初版）（装幀：小穴隆一）（坪田文庫）

好評を得た『お化けの世界』『風の中の子供』に続き、都新聞へ連載された坪田譲治の長編小説が新潮社から単行書で発行されたものの初版です。カバーと表紙、および挿絵のデザインは小穴隆一が行っています。



坪田譲治 『鶴の恩がへし 日本昔話』 新潮社、昭和18年(初版) (表紙: 恩地孝四郎)

(坪田文庫)

『お化けの世界』『風の中の子供』『子供の四季』の3作で文壇に地位を確立した坪田は、戦前期はしばらく中編の小説も手がけましたが、やがて児童文学へ意欲的に取り組むようになるとともに、民話にも関心を深めました。戦時に発表された『鶴の恩がへし』は日本民話を再話した最初の本格的な作品ですが、この方向は戦後になって発展し、『日本童話集』(「世界少年少女文学全集28」、創元社、昭和29年)、『新百選日本むかしばなし』(新潮社、昭和32年)、『日本童話全集』(あかね書房、昭和35~36年)など、さまざまな表題で出版された一連の「日本むかしばなし」に結実します。童話と民話に対する坪田譲治の深い理解には川端康成も敬意を寄せていました。

坪田譲治 書(軸装)「浮雲遊子の意 落日故人の情」

坪田正男氏寄贈品(坪田文庫、A 軸物1)

中国・唐代の詩人、李白の詩「送友人」(友人を送る)の内容を平明に書き表したもの。

坪田譲治の愛読書に『唐詩選』がありましたが、彼は少年の頃から親しんできた漢詩に深い知識があり、それをふまえた言葉を書や色紙にしばしば記しています。

坪田譲治 書(色紙)

「野尻湖にて 谷間に虹たち林に閑古鳥鳴く 吾は湖上に魚を釣るなり」

坪田正男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙3)

「友はいづくに在りやと問うこと勿れ 唯山中の静寂に耳を傾けよ 昭和二十三年秋」

坪田正男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙5)

「心の清きものは幸なり」

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙12)

「故郷の鮒」

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙14)

「古里の小川に鮒はまだ居るだろうか」

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙15)

「故郷に花静なる田園あり」

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙16)

「心の遠きところ花静なる田園あり」

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙17)

「少年は咲く花 青春は歌う鳥 中年風雪 晩年如何」(複製品)

坪田善男氏寄贈品(坪田文庫、A 色紙24)

3 佐藤春夫 明治25年(1892)生、昭和39年(1964)歿

佐藤春夫は現在の和歌山県新宮市出身の文学学者で、活動の内容は詩、小説、評論、随筆など広い分野にわたっています。商家や医家として江戸時代から続いてきた富裕な家に生まれた彼は、旧制中学に在学中から文学の活動を開始し、上京して生田長江に師事しました。明治43年頃から新詩社で堀口大學と知り合い、永井荷風を慕って慶應義塾大学予科に入学しますが大正2年に中退し、一時期は油絵に没頭するものの、大正6年に『西班牙犬の家』『病める薔薇』を発表。続いて『田園の憂鬱』『お絹とその兄弟』『都会の憂鬱』を発表して大正期の文壇で活躍し、高い地位を築きました。以後も創作は豊かに続けられ、戦後は昭和23年に芸術院会員となり、昭和35年には文化勲章を受賞するなどし、多数の後進の作家たちを指導する立場になり、文壇の重鎮的な存在でした。

大正期には佐藤春夫も鈴木三重吉主宰の児童文学雑誌『赤い鳥』に他の著名な作家たちとともに作品を寄稿していましたが、昭和に入ると『赤い鳥』には坪田譲治の作品が掲載されることが多くなり、佐藤と坪田はその頃から知り合っています。佐藤が執筆した童話作品は数こそ多くはなく、異国趣味の強いものですが、親しんでいた新約聖書や彼の文学のロマン主義的な傾向から取り組まれており、ここに坪田譲治と氣脈が通う素地もあったかと思われます。

坪田譲治が昭和18年から翌年にかけて海軍の報道班員として日本軍統治下の東南アジアへ派遣されたとき、陸軍から派遣された佐藤春夫とインドネシアのスラバヤでいっしょになつておらず、この機会に佐藤の短編小説『じゃかるたをとめ』が生まれています。大正期から文名が高く、多くの若い作家たちから指導者として仰がれていた佐藤に対しては、2歳年長の坪田のほうが師に対するような敬意を払っています。

佐藤春夫『戦線詩集 附江上日記其他』新潮社、昭和14年（装幀：著者）

坪田正男氏寄贈品（坪田文庫）

昭和13年に上海を訪れ、日中戦争の戦跡を実見して綴られた詩集です。見返しに坪田譲治への献辞が記されています。のちにこの本は、晩年の坪田譲治が児童文学の研究のために自身の蔵書を公開する目的で自宅敷地内に設けた「びわのみ文庫」の登録印が捺されています。

佐藤春夫『訪集 大東亜戦争』龍吟社、昭和18年（装幀：藤田嗣治）

坪田正男氏寄贈品（坪田文庫）

この本も見返しに坪田譲治への献辞が記されています。第二次大戦中は多数の作家が陸海軍に動員され、戦地へ派遣されて文筆で戦況を伝えることに従事しましたが、佐藤春夫と坪田譲治も日本軍占領下のスラバヤで昭和18年から翌年にかけて一緒にいます。この本も後に「びわのみ文庫」へ登録されています。

佐藤春夫 書(扇面、複製品)「水近き小家の方へ窓ゆかし」

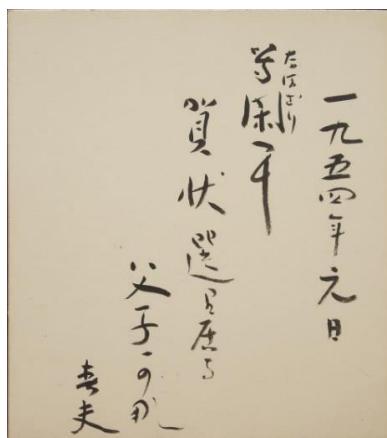
坪田善男氏寄贈品(坪田文庫、B 軸物 2)

坪田譲治は昭和 14 年から 10 年間、毎年 5 月に鮑(ハヤ)を釣るために長野県の野尻湖を訪れており、終戦の前後にはここへ長く疎開をしていました。これは湖畔にあった坪田の小さな別荘を訪れた佐藤春夫が印象を扇面に記した書で、「水近き 小家のかたへ 窓ゆかし よき庵よりも 立ち寄れば 櫓の音ひ // き 小舟来たり 魚を買へとそ」と記され、その充足した佇まいを称えています。

佐藤春夫 書(色紙)「一九五四年元旦 等閑に賀状選りをる父子かな」昭和 29 年

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、B 色紙 2)

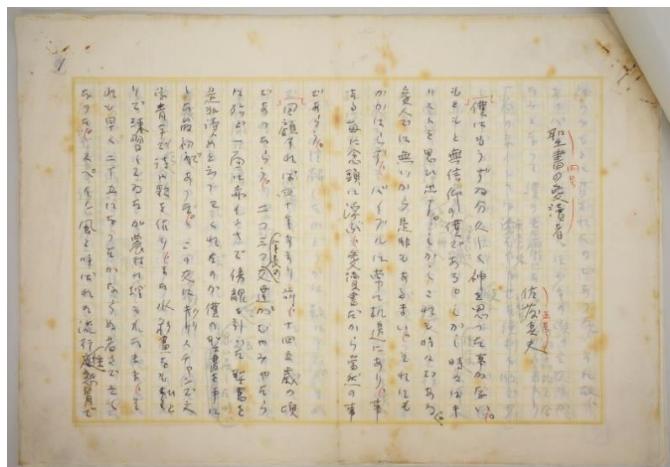
元旦の寛いだ情景を思わせる書ですが、この年に坪田譲治の最初の全集が新潮社から出版され、翌年に芸術院賞を受賞しました。佐藤春夫も坪田の全集出版と受賞を心から喜びました。



佐藤春夫 (原稿)「聖書の愛読者」(5 枚) 昭和 27 年

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、B 原稿 37)

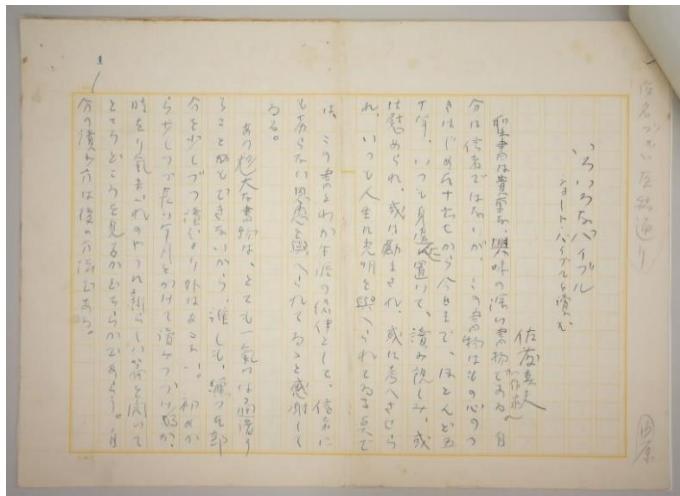
児童文学者の坪田理基男氏も関係して教文館から発行された雑誌『ニューエイジ』の昭和 27 年 3 月号に掲載された随筆です。信仰からではなく自由な愛読者として聖書に親しんできたことが書かれています。臨川書店版『定本佐藤春夫全集』(昭和 63 年)第 24 巻にも再録されています。



佐藤春夫（原稿）「いろいろなバイブル ショートバイブルを読む」（7枚）昭和29年

坪田理基男氏寄贈品（坪田文庫、B 原稿 38）

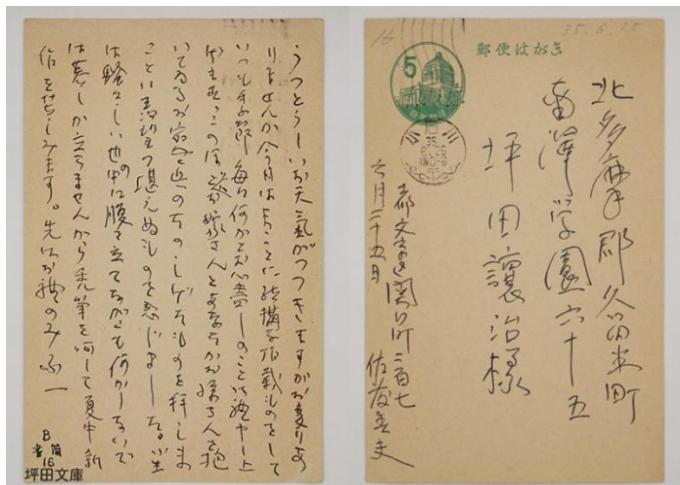
これも佐藤が雑誌『ニューエイジ』の昭和 29 年 6 月号に寄稿した隨筆で、臨川書店版『定本佐藤春夫全集』第 24 巻にも再録されています。



佐藤春夫 書簡（葉書、中元への礼と孫を抱いた譲治の写真について）

昭和 35 年 6 月 25 日消印

坪田理基男氏寄贈品（坪田文庫、B 書簡 16）



うつとうしいお天気がつつきますが、お変わりありませんか。今日はまことに結構な頂戴ものをしていつも季節毎に何かとお心尽しのこと御礼申し上げます。このほどハお嫁さんとあなたかお孫さんを抱いるお写真のたのしげなものを拝します。ことに羨望に堪えぬを感じました。小生は騒々しい世の中に腹を立てながらも何かしないで暮らしが立ちませんから悉筆を何して夏中新作を苦しみます。先はお礼のみ不一

佐藤春夫 書簡（葉書、初平の桃への礼）

昭和 38 年 8 月 28 日付、同日消印

坪田理基男氏寄贈品（坪田文庫、B 書簡 17）

坪田譲治は大切な人へ季節ごとの贈り物を欠かしませんでした。好評だったのは故郷の名産の白桃や鯛の浜焼で、岡山で高級贈答品を扱っていた「初平」や「志ほや」をよく利用しました。

4 堀口大學 明治 25 年(1892)生、昭和 56 年(1981)歿

日本の近代詩に新生面を開いた詩人、堀口大學は、外交官で隨筆家、漢詩人としても知られる堀口長城を父にもち、外地にあった父に代わってその郷里の新潟県長岡で祖母に育てられました。第一高等学校の受験に失敗したため、与謝野鉄幹・晶子夫妻が運営する新詩社で文芸活動に携わり、そこで佐藤春夫と知り合って終生の親交を結びました。

そして佐藤とともに慶應義塾予科に入学し、永井荷風らに学びました。父に従って外遊する機会も多く、フランス語の語感と日本語の文脈を織り交ぜた新しい詩を確立し、『月とピエロ』(大正 8 年)、『新しき小径』(大正 11 年)などの詩集で知的な抒情性を注目されたほか、『昨日の花』(大正 7 年)、『月下の一群』(大正 14 年)などのフランス詩の訳詩集も発表し、川端康成や横光利一ら「新感覺派」の文芸を導く役割を果しました。戦後も『人間の歌』(昭和 22 年)など発表を続け、昭和 45 年に文化功労者に選ばれ、昭和 54 年に文化勲章を受賞しました。

戦争末期から長野県の野尻湖畔に疎開していた坪田譲治は、作家の小田嶽夫の勧めで近くへ疎開していた堀口大學を訪ねますが、次には堀口と小田が坪田の疎開先を訪問し、互いに意気投合して親しい交際が始まったのでした。昭和 52 年に椿山荘で行われた坪田譲治の米寿の祝賀会では、堀口も発起人になっています。

堀口大學(訳)『ランボオ詩集』新潮社、昭和24年(初版)

坪田正男氏寄贈品(坪田文庫)

冒頭に坪田譲治への献辞が作者の直筆で記され、「一九四九年二月二十二日 新潮社でお目にかかるべツティ・ベツツのペンで」と書き添えられています。フランスの詩人、ランボーの詩集は戦前から中原中也が翻訳し、戦後は小林秀雄など多くの作家が翻訳・紹介しましたが、新潮社から昭和 24 年に発行された堀口の訳は文庫化もされ、広く読まれました。

堀口大學 (原稿)「坪田さんのカンカン帽」(8 枚)

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、B 原稿 68)

これは昭和 29 年に新潮社から発行された『坪田譲治全集』の月報に掲載された文の原稿で、昭和 52~53 年に新潮社から増補・刊行された『坪田譲治全集』の月報にも再録されました。坪田の悠揚とした人柄を讃えた内容で、詩人の文章らしく、行頭の位置が細かく指定されています。

(写真パネル)「日本芸術院会員祝賀会 椿山荘にて」昭和 39 年 2 月 11 日

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、A 写真 14)

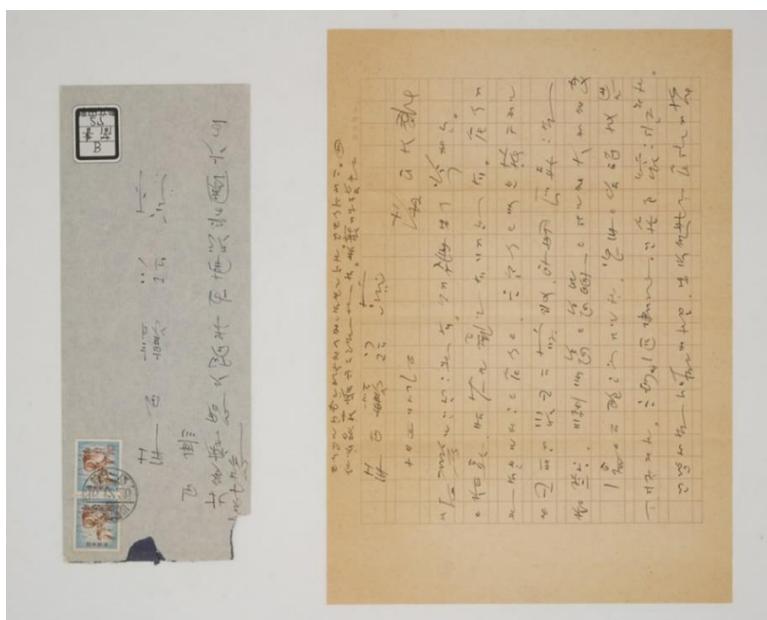
坪田譲治が日本芸術院会員へ推挙されたのを記念する祝賀会の情景で、左から佐藤春夫、堀口大學、坪田譲治夫妻が写っています。

堀口大學から坪田譲治へあてた書簡

いずれも坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、B 書簡 27~33)

堀口大學の手紙にも坪田譲治から受け取った贈り物への礼状が多く、原稿の紹介など文学に関する通信もあります。坪田は岡山の「初平」と「志ほや」から果物や海産物を贈り、故郷の味覚を親しい知人へ欠かさず届けていました。これに対して堀口は言葉を尽くしてその見事さを称え、感謝の気持ちを表しています。

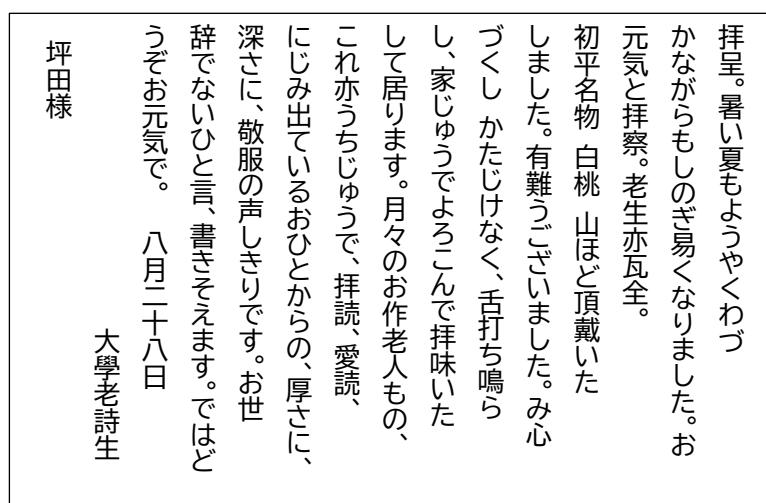
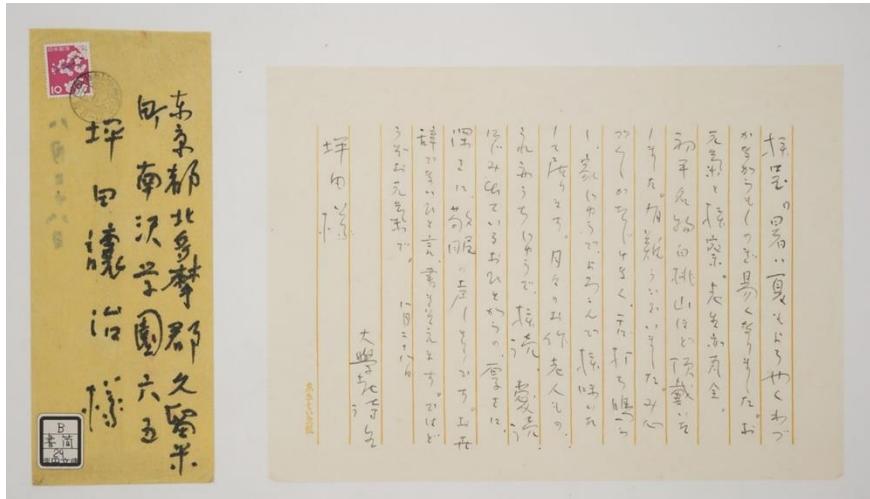
書簡（封書、初平の梨への礼と賀状廃止の告知） 昭和 36 年 12 月 26 日付、同日消印



「お手たして居りますが、お元氣で何よりと存
じ上げます。小毛亦一同無事。」と休心願い上げます。
一昨日は思つもよひず、初平の名品支那
香梨、三笠主砲の砲弾のような大きな奴を
山ほど沢山に拝受、早速風味いたし
ましたがつまごの何人の、小びんの毛が抜けたつ
の香味、舌打ち鳴らした」とでした。何ごと
も有難うございました。ひと筆おん礼まで。
十一月二十六日 堀口大學
坪田譲治様
今度賀状廃止にいたしました。老齢とみに加わり
めんどうでやうしきれなくなつたからです。ごめんなさい。

書簡（葉書、初平の鯛の浜焼への礼） 昭和 38 年 2 月 23 日付、25 日消印

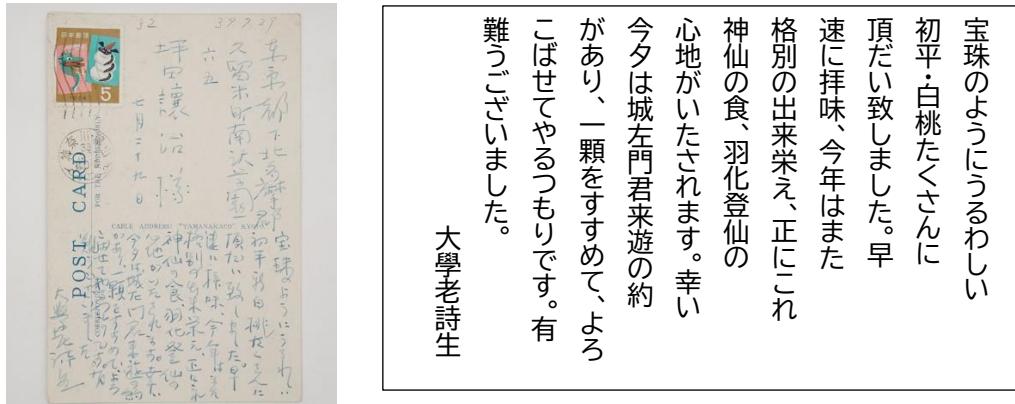
書簡（封書、初平の桃への札と「老人もの」について） 昭和38年8月28日付、同日消印



書簡（葉書、祝いの言葉と原稿の紹介） 昭和38年12月15日付、16日消印

書簡（葉書、志ほやの鯛への札） 昭和38年12月19日付、当日消印

書簡（大原女の絵葉書、初平の白桃への札） 昭和39年7月29日付、同日消印



書簡（葉書、初平の鬼平紅柿への札） 昭和38年12月7日消印

5 尾崎士郎 明治31年(1898)生、昭和39年(1964)歿

現在の愛知県西尾市吉良町出身の文学学者で、早稲田大学政治経済学科へ入学するものの、政治や社会主義運動に強い関心をもち、大学は除籍になります。大正10年に『獄中より』『逃避行』を発表するとともに、次第に社会主義から離れてゆき、文学の活動に専念します。昭和8年から都新聞に『人生劇場』が連載され、10年に刊行されたその「青春篇」がベストセラーになりました。これは以後も「愛欲篇」「残侠篇」などと続き国民的な文学となりました。また昭和14年には関ヶ原合戦に題材をとった『篝火』を発表し、歴史小説の分野へ活動を広げました。

戦時中に大政翼賛会や文学報国会を通じて行なった活動により戦後は公職追放になりますが、やがて復帰し、昭和25年には『天皇機関説』を発表するなど創作を続けました。また、相撲に造詣が深く、横綱審議会の委員としても活躍しました。昭和39年に歿するのと前後して文化功労者に推挙されました。

ともに早稲田大学で学んだ坪田と尾崎は、小川未明が主宰する作家たちの集まりで大正12年に知り合いましたが、以後2人は終生仲が良く、長年にわたり友情を続けました。昭和10年に雑誌『改造』に連載されて好評を得た坪田譲治の『お化けの世界』の単行書を発行した竹村書房からは、同じ頃に尾崎士郎の『人生劇場』が発売されており、2人は文壇での成功を互いに喜び合いました。

坪田は随筆や評論や全集の月報の中でたびたび尾崎の飾らない実直な人柄と友人の多さを讃えています。文学や政治や社会に対する立場を超えて幅広い交際相手をもっていた2人ですが、作家として互いを認め合う関係は特別でした。

尾崎士郎

『人生劇場』 竹村書房、昭和10年(初版) (装幀:中川一政)

『続々人生劇場 残侠篇』 上下巻、竹村書房、昭和11年(初版) (装幀:中川一政)

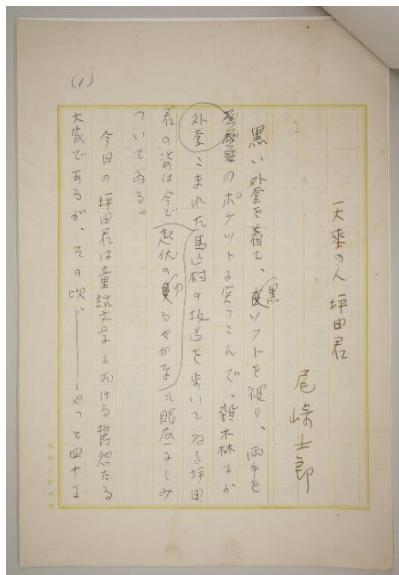
(いずれも坪田文庫)

尾崎士郎の代表作『人生劇場』の初版本で、いずれも冒頭に坪田譲治への献辞が作者の直筆で書かれています。つまりこの本が出版されたとき、尾崎が大切な友人である坪田へ真っ先に送り届けたものです。この作品は最初に川端康成が文芸時評で激賞し、やがて評判が大きく広まって、国民的なベストセラーとなりました。この本が出版された竹村書房からは、同じ昭和10年に坪田譲治の『お化けの世界』も発行されており、坪田においてもこの作品が最初のヒット作になりました。洋画家の中川一政が行った装幀も魅力的です。

尾崎士郎（原稿）「天来の人 坪田君」（6枚）

坪田理基男氏寄贈品（坪田文庫、B原稿22）

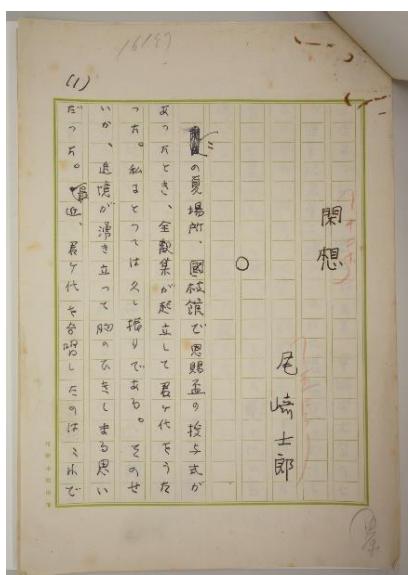
大正12年に坪田譲治と知り合って、以来長く交際を続けてきた尾崎士郎が坪田のことを記した隨筆です。文中で尾崎は「自然に結びついた感情というものは会うことの重なるにつれていよいよ抜きがたいものになってきた」と述べ、坪田のことを「誰にも好意を持」ち、「個々の人間に対しては、それぞれの立場と境遇に応じて善意の解釈を施すことを忘れなかつた」と讃えています。



尾崎士郎（原稿）「閑想」（13枚）昭和29年

坪田理基男氏寄贈品（坪田文庫、B原稿23）

冒頭は尾崎が深く傾倒していた相撲の話題から始まり、さまざまな思い出を綴りながら、戦後の社会の劇的な変化と世相の移り変わりについて論じています。雑誌『ニューエイジ』昭和29年10月号に掲載された隨筆です。



尾崎士郎 書(軸装)「崎嶇間関 五十の秋 この涙空しく蓄へてもらす時なし」

昭和21~22年頃

坪田善男氏寄贈品(坪田文庫、B 軸物 1)

坪田譲治は角川書店版『昭和文学全集』の「尾崎士郎集」(昭和 29 年)に執筆した解説文(同書 p505)の中で、「あの頃、彼の家に集つてゐたものは何人あつたであらう。みんな、そこをふるさとして、文学の道に出発したのである。彼の人間的魅力はみんなの感じるところで、いつの時代でも、彼を中心にして、何人もの有名無名の文士が遠近さまざまの形で集つてゐた。」と記したあと、川端康成が尾崎の『人生劇場』を激賞して最初に大傑作と讃えたことを述べて、最後に、この書が7・8 年前に尾崎が坪田のために書いてくれたものであることを紹介しています。



坪田譲治「片隅の交友録」(昭和 37 年に雑誌『新潮』に連載)の「尾崎士郎氏」にも下記の文章が記されていて、2 人の間柄がうかがわれます

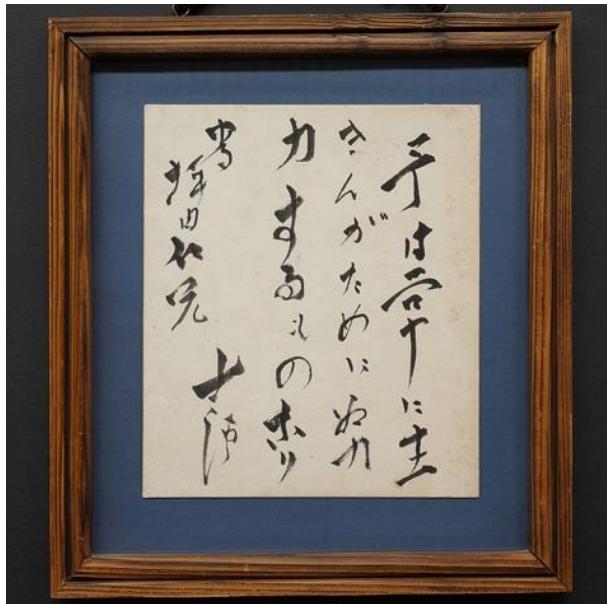
「…私をそこにひきつけた、一番大きな力は、やはり、尾崎さんが私の文学を認めていて下さると云う、その思いだったようです。これは、その頃ばかりではありません。三十何年のつきあいの間、尾崎さんは私と云う人間と、その文学のネウチを認めていてくれるんだ——この思いが、どんなに、永いその間に、ともすれば崩れようとする、私の意思、私の心の張りを支えてくれたか解りません。私が尾崎さんに、一番感謝しているのは、このことです。

然しこれは、私ばかりではありません。きっと、尾崎さんとつき合う程の人は、みんな、そう思ってるのです。尾崎さんこそは、自分を認めている。そう思って、それを力に、文学に、編集に、或は何かの仕事に精進しているのです。誰にも彼にも、この感じを持たせると云うことは、実に大変なことです。一日や二日は、そう云うことも出来ましょう。何十年にもわたって、その信用をうらぎらないと云うのは、やはり、尾崎さんに信実があるからです。」

尾崎士郎 書(色紙)「予は常に生きんがために努力するものなり 為坪田仁兄」

坪田善男氏寄贈品(坪田文庫、B 色紙 1)

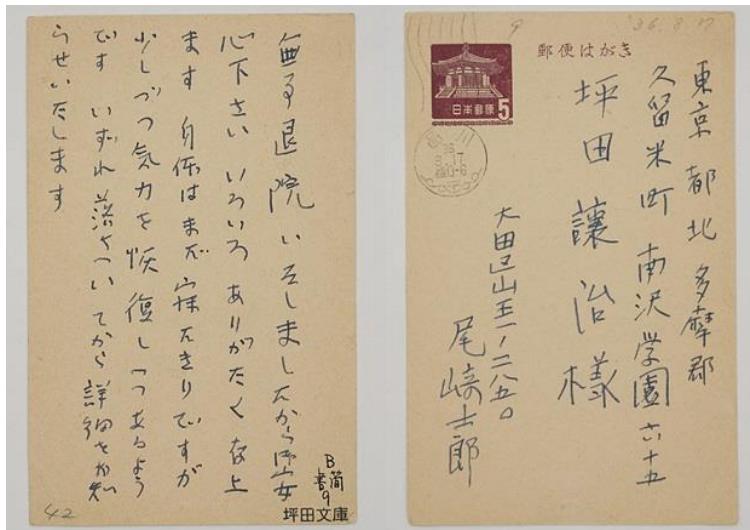
坪田讓治にあてて書かれた色紙です。尾崎のひたむきで真摯な人柄と、その人生観や、坪田に対する敬愛の念が伝わってきそうです。



尾崎士郎 書簡 (葉書、退院の知らせ) 昭和 36 年 8 月 17 日消印

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、B 書簡 9)

尾崎は昭和 36 年 6 月 24 日から腸癌の手術のために 2 ヶ月間にわたり慈恵医科大学附属病院へ入院しており、これはその退院の知らせです。このときはいったん全治したものの、再発して 2 年後に亡くなりました。死の前日に文化功労者として顕彰されることが決まっています。



無事退院致しましたから御安心下さい。いろいろありがとうございましたがたく存上ます。身体はまだ弱たまりですが少しづつ気力を恢復しつつあるようです。いざれ落ちついてから詳細をお知らせいたします。

6 川端康成 明治32年(1899)生、昭和47年(1972)歿

現在の大阪市内に生まれた川端康成は、少年期に肉親を次々と喪う不幸に見舞われますが、第一高等学校を経て東京帝国大学に入学し、旧制高校在学中から文芸活動を活発に行って、大正13年には帝大の国文科を卒業しました。

一高在学中の大正8年に『ちよ』を発表し、10年から雑誌『新思潮』を創刊して『招魂祭一景』で文壇に注目されますが、大正13年から横光利一らと『文芸時代』を創刊し、新感覚派の文学者として一世を風靡しました。そして大正15年に『伊豆の踊り子』が発表され、昭和12年の『雪国』で不動の評価を確立しました。戦時中は文学活動を控えていましたが、戦後も『千羽鶴』『山の音』『名人』『みづうみ』『眠れる美女』『古都』などの作品を発表し続けました。

生涯を通じて高い社会的な評価を受けており、昭和33年には国際ペンクラブ副会長に推されて国際的な作家として認められましたが、昭和26年に日本芸術院賞、昭和36年に文化勲章、昭和43年にはノーベル文学賞を受賞しています。

川端康成には『伊豆の踊り子』など少女を主人公や題材にした小説があり、児童文学にも深い理解を有していましたが、雑誌の刊行に携わっていた若年期には文芸時評も活発に行っており、坪田譲治については彼が大正期に発表した『正太の馬』などの初期作品を早くから高く評価し、坪田のような作家が下積みの立場に埋もれていることを嘆いています。

坪田との直接の出会いは、妻の宇野千代とともに伊豆半島の湯ヶ島に滞在していた尾崎士郎が、川端もいっしょにいるから、子どもたちも連れてくるようにと坪田を招き寄せたことでした。坪田はこのとき伴っていた下の子(理基男氏)が5、6歳の頃であったと述懐しているので、それは昭和2年か3年頃のこととみられます。このときから2人の友情がずっとあたたかく続いたことは、展示した川端の手紙も示すとおりです。

『川端康成全集』第9巻、新潮社、昭和35年、月報4

坪田正男氏寄贈品(坪田文庫)

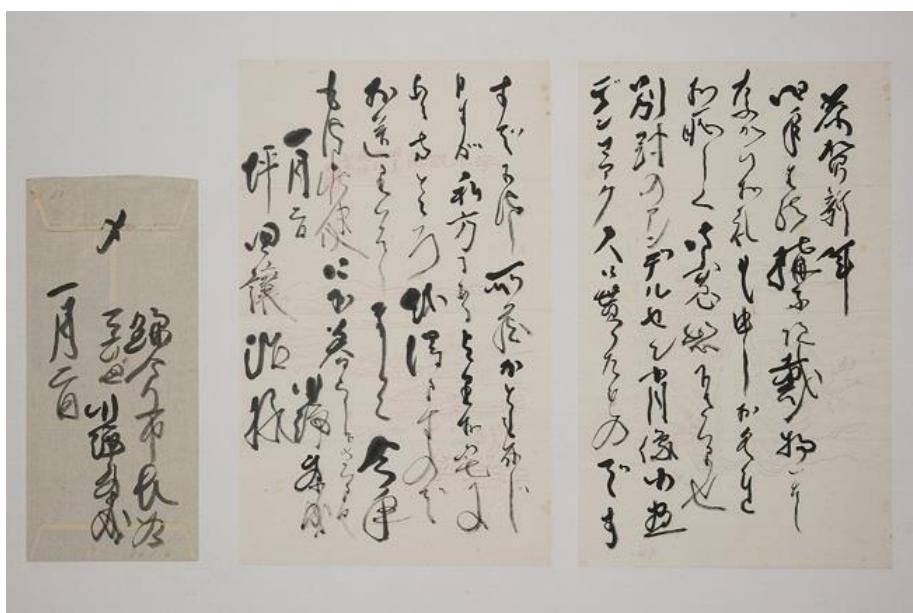
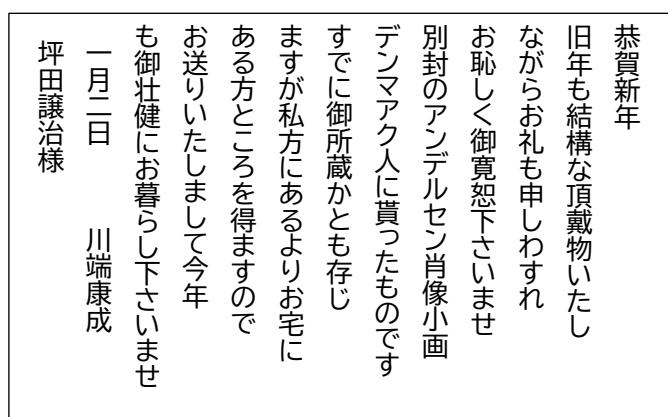
この中に坪田譲治が随筆「川端さんの思い出」を寄稿しており、尾崎士郎の誘いで子ども2人をつれて伊豆半島の湯ヶ島を訪れ、そこで川端康成に初めて会ったときのことを記しています。しかしこのときは5~6歳だった下の子が、歯が痛くなつて泣き出したため、そそくさと帰ることになつてしましました。そのいきさつを軽妙な語り口で述べています。

川端康成 アンデルセンの肖像と添状(封書)

昭和 46 年 1 月 2 日付、4 日消印

坪田理基男氏寄贈品(坪田文庫、B 写真 1、B 書簡 11)

坪田譲治が歳末に届けた贈り物への礼状を兼ねた年賀状で、額に入っているのは世界的な童話作家、アンデルセンの肖像画のオフセット印刷図版です。原画を描いたのはデンマークの国民的な画家で、アンデルセンの親友でもあったカール・ハインリヒ・ブロッホです。3 年前にノーベル文学賞を受賞していた川端が、デンマーク人からもらったというこの絵を、自分よりも坪田譲治のほうが所有者としてふさわしいと称えながら贈っています。

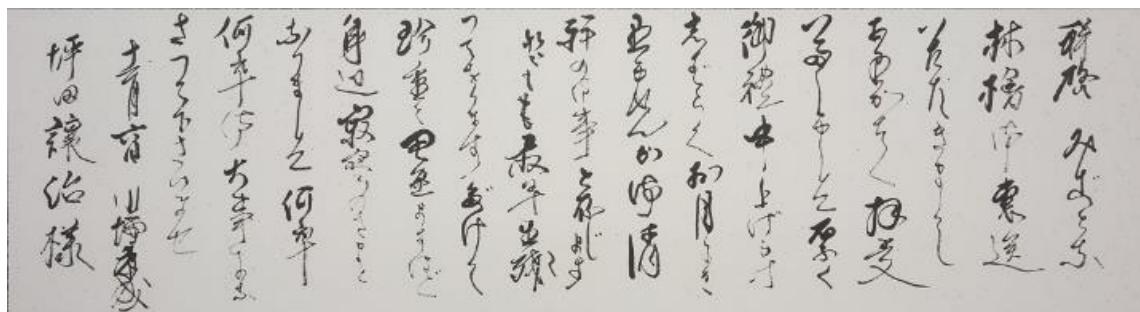


川端康成 書簡(封書、林檎への礼状)

(年不詳)12月6日

坪田善男氏寄贈品(坪田文庫)

坪田讓治から贈られた「みごとな林檎」への礼状です。後半には「身辺寂寥のさま」と記されており、昭和47年4月16日の突然の死(一般にはガス自殺とされているが、これを否定する説もあり)との関連はわかりませんが、齢を重ねる中で次第に感じられてきた寂しさを訴えているかのようです。



(一文字未解読)

拝啓 みごとな
林檎御恵送
いたしまして
ありがたく拝受
いたしまして厚く
御禮申し上げます
しばらくお目にか
りませんが御清
祥の御事と存じます
私どもも最早生残
つまむすだけ
珍重と□□ますほど
身辺寂寥のさまと
なりまして何卒
何卒御大事にな
さつて下さいませ
十一月六日 川端康成
坪田讓治様

川端康成の坪田譲治評

川端は湯ヶ島で尾崎士郎から坪田譲治を紹介されると、文学雑誌に執筆していた文芸時評の中で、坪田が大正15年に発行していた最初の単行書『正太の馬』を取り上げて称賛するとともに、子どもの世界を描くことにかけて坪田が有していた高い力量を評価し、彼の文学が世間から光を当てられていないことを嘆いています。

「…好色と好戦とが、悪いといふわけではない。唯さういふ喧騒のために、質実な傑れた作家、例へば創作集『正太の馬』を出版し、短篇小説「心村に帰る」(文芸都市四月号)を発表してゐる坪田譲治氏のやうな人が、ジヤアナリズムから閑却されてゐることに、義憤を感じたまでである。坪田氏は今日の日本に唯一無二の真実の子供の世界の作家であることは、文壇の一角から既に認められてゐながら——。」

(初出)『文藝春秋』昭和4年4月号「文芸時評」、「好色と好戦」

(再録)『川端康成全集』第30巻、新潮社、昭和57年、p292

「また、那須氏の二作に子供が取り扱はれてゐることから、私は坪田譲治氏の作品を思ひ出す。坪田氏のやうに子供を愛する父として、子供の世界に入り切つて、子供を描いた作家は、先づ日本文学に類がないであらう。その珠玉の短篇が「正太の馬」といふ薄汚い安本一冊となつて、埋もれてゐるのは、まことに心痛む世の悪徳である。」

(初出)『文藝春秋』昭和7年2月号「文芸時評」、「新作家二三」

(再録)『川端康成全集』第31巻、新潮社、昭和57年、p28

「…わが子を描く作家としては、坪田譲治氏がすぐれてゐる。坪田氏の子供短編集『正太の馬』は、あのまま埋れさせるには勿体ない本である。」

(初出)『文藝春秋』昭和8年6月号「文芸時評」、「徳田、正宗氏の作品」

(再録)『川端康成全集』第31巻、新潮社、昭和57年、p116

関連文献

堀口大學「坪田さんのカンカン帽」

(初出)『坪田譲治全集』第4巻、新潮社、昭和29年11月、月報7号

(再録)『坪田譲治全集』第10巻、新潮社、昭和53年4月、月報p11-12

坪田譲治「川端さんの思い出」

『川端康成全集』第9巻、新潮社、昭和35年、月報4号に所収

坪田譲治「片隅の交友録」

(初出)雑誌『新潮』昭和37年2~11月号

(再録)短編集『賢い孫と愚かな老人』新潮社、昭和40年

(再録)『坪田譲治全集』第12巻、新潮社、昭和53年、p276-336

(p283-290に「佐藤春夫先生」、p290-296に「尾崎士郎氏」)

坪田譲治「人間尾崎士郎」

(初出)雑誌『新潮』昭和38年4月号

(再録)短編集『賢い孫と愚かな老人』新潮社、昭和40年

(再録)『坪田譲治全集』第12巻、新潮社、昭和53年、p336-341

(p337-338に川端康成とのエピソード)

尾崎士郎「良友歓待」

(初出)『一文士の告白』昭和39年6月、新潮社

(一部を再録)「坪田譲治全集」第2巻、新潮社、昭和52年7月、月俸、p9-12

坪田譲治『小説尾崎士郎 一あのことこのこと一』

(初出)雑誌『別冊 小説新潮』昭和41年12月号

(再録)『坪田譲治全集』第6巻、新潮社、昭和53年、p334-349

各作家の基本事項はおもに下記を参照しました。

日本近代文学館(編)『日本近代文学大事典』講談社、昭和52~53年

大阪国際児童文学館(編)『日本児童文学大事典』大日本図書、平成5年

(展示品目録) 坪田譲治と大正・昭和の文豪たち

令和8年(2026)1月16日(電子版発行)

1月21日(改訂)

岡山市立中央図書館(岡山市北区二日市町56番地)

執筆:飯島章仁(同館主査学芸員)

岡山市立中央図書館

2026